



イラク・クルディスタンの 変わりゆく権力構図

——第4回議会選挙の結果から——

(一財) 日本エネルギー経済研究所
中東研究センター

主任研究員 吉岡明子

はじめに

イラク北部の自治区¹⁾であるクルディスタン地域で、2013年9月に選挙が行われた。自治区の国会にあたるクルディスタン議会の選挙である。自治区で初の選挙が実施され、自治政府であるクルディスタン地域政府(KRG: Kurdistan Regional Government)が誕生したのは1992年だった。それから20年以上が経ち、今では中央政府に対するゲリラ闘争が過去の時代の出来事となり、イラク国家の枠組みの中で自治が確立し、経済発展も進みつつある。そうした時代状況を背景に、かつて圧倒的な地位を誇ったKDP(クルディスタン民主党)とPUK(クルディスタン愛国同盟)の二大政党の支配は揺らぎ、自治区の権力構造は現在、大きな変化の時期を迎えようとしている。

以下では、イラクのクルディスタン地域でこ

れまでに実施された選挙結果を分析することによって、政党間パワーバランスの変化とその背景を明らかにする。そして今後のイラクに与える影響を考察したい。

選挙の仕組み

クルディスタン議会選挙は、自治区全体を一区とする比例代表制で行われる。定数は111議席で、うち11議席が少数派枠(トルコマン民族5議席、キリスト教徒5議席、アルメニア教徒1議席)である。今回の選挙では、少数派枠を含め27政党、1,129名が議席を争った。有権者は18歳以上、候補者は25歳以上で、いずれもクルディスタン地域の市民でなければならない²⁾。各党とも、約3週間のキャンペーン期間中に町中にポスターや党旗を貼り、支持者が街頭に繰り出して支持を訴え、選挙戦を盛り上げていた。総



町中に貼られた候補者のポスターと党旗

じて選挙への関心は高く、投票率は73.9%（内訳はドホーク県76.4%、エルビル県71.7%、スレイマニヤ県73.0%）に上った。

二大政党時代の終焉

選挙結果は、KDPが74.4万票（38議席）を集めて第一党となった。与党の一角を担ってきたPUKは35.1万票（18議席）で三位に終わり、野党のゴランが47.7万票（24議席）を得て二位に躍進した。さらに、ムスリム同胞団に近いKIU（クルディスタン・イスラーム連盟）が18.7万票（10議席）で四位、同じくイスラーム政党でより原理主義的と言われるKIG（クルディスタン・イスラーム・グループ）が11.9万票（6議席）で五位だった。その他、IMK（クルディスタン・イスラーム運動）を含む小党の4党が一議席ずつを獲得した。

今回の選挙結果の最も重要な点は、二大政党時代の終焉を決定づけたことだろう。4年前の選挙からPUKの退潮傾向は明らかであったが、それでもKDPとの連立によってその影響を最小限に食い止め、現状維持を保ってきた。しかしながら、与党が統一候補者リストを作成せず

筆者紹介

1999年大阪外国語大学外国語学部卒。中東経済研究所を経て2005年より現職。2007年にガルフ・リサーチ・センター客員研究員。専門はイラクの現代政治・経済並びにイラクにおけるクルド問題。

別々に出馬したことで、政党間の実力差が露わになり、二大政党が与党として君臨する時代が過ぎ去ったことを印象づけた。

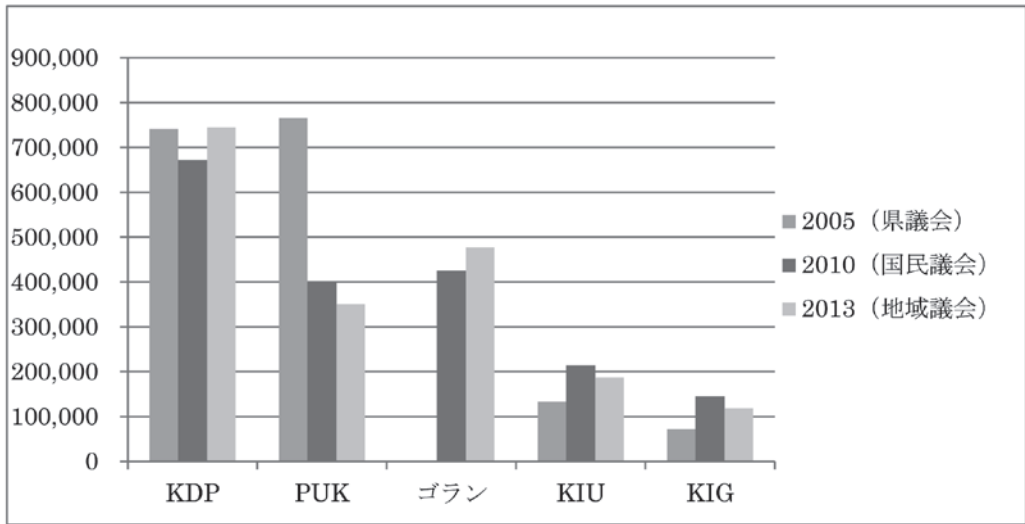
自治区を構成する三県においては、イラク国会選挙、クルディスタン議会選挙、県議会選挙のいずれにおいても主要政党の顔ぶれはほぼ同じであり、主な政治勢力は概ね固定化している。従って、以下では、KDPとPUKが別々の候補者リストで選挙に臨んだ過去3回の選挙（1992年および2013年のクルディスタン議会選挙、2005年の県議会選挙）、さらに、統一リストで出馬したが非拘束名簿式であったため非公式ながら党別の得票数が明らかになっている2010年のイラク国会選挙、の合計4つの選挙結果を参照しながら、各党の選挙結果と勢力構図の変化を分析する。

図表：第4回クルディスタン議会選挙結果

政党名	得票数	得票率	議席数
KDP	743,984	37.8%	38
ゴラン	476,736	24.2%	24
PUK	350,500	17.8%	18
KIU	186,741	9.5%	10
KIG	118,574	6.0%	6
IMK	21,834	1.1%	1
民主社会主義者党	12,501	0.6%	1
共産党	12,392	0.6%	1
第三の道	8,681	0.4%	1
その他(少数派枠を含む)	37,007	1.9%	11
合計	1,968,950	100.0%	111

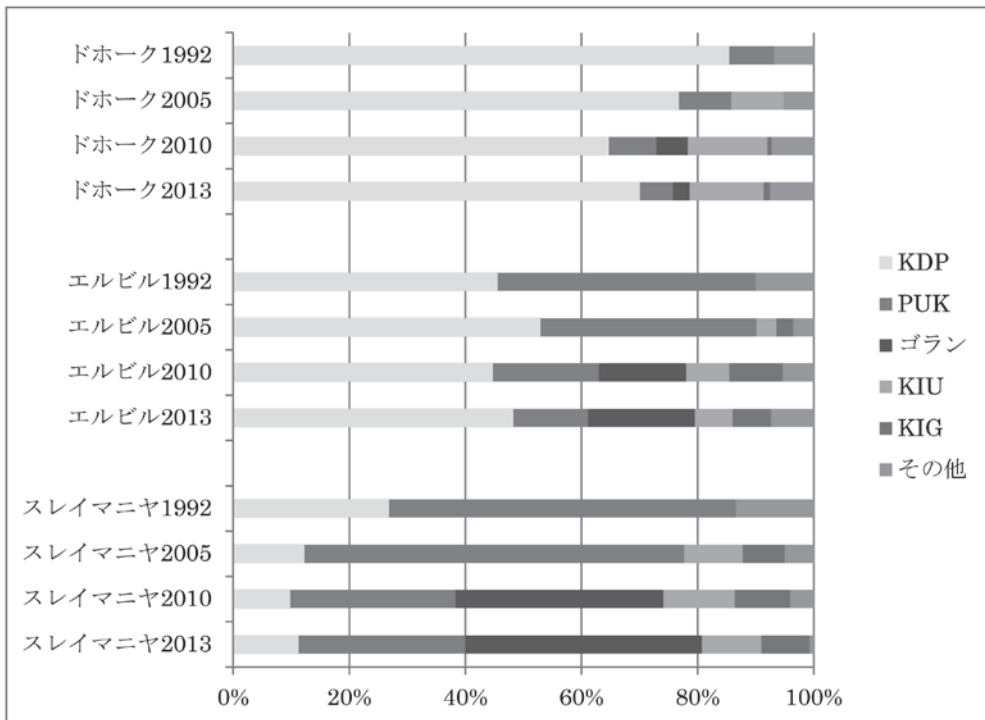
出所：選管発表資料をもとに筆者作成。

図表：政党別得票数の推移



出所：選管発表資料をもとに筆者作成。

図表：各党の県別得票率の推移



注：1992年はクルディスタン議会選挙結果。出所はGareth R.V. Stansfield (2005) *Iraqi Kurdistan : Political Development and Emergent Democracy*, Routledge, p.201.

2005年は県議会選挙結果。ただし総投票数のみ同日実施の国会選挙結果を利用。出所は選管発表資料。

2010年はイラク国会選挙結果。出所は選管発表資料。ただし、KDPとPUKの内訳についてはRudaw, Sep 16, 2013.

2013年はクルディスタン議会選挙結果。出所はRudawウェブサイト(2013年10月4日アクセス)

KDP の強み

KDPは、1946年の結成以来、イラクにおけるクルド民族解放運動を担い続けてきた政党である。1970年代から現党首のマスウード・バルザーニが父ムスタファ・バルザーニの跡を継いで党を率いており、2005年以降はKRG 大統領として、自治区内外で存在感を増している。甥のネチルヴァンKDP 副党首が第五期（2006年5月～2009年8月）および第七期（2012年4月～）のKRG 首相を務めている。2005年、2010年、2013年の選挙結果を比較すると、KDPは一貫して70万前後の票を確保しており、自治区内で安定した強さを見せている。

選挙戦においてKDPは、政権党として、特にイラク戦争後の10年間に実現してきた経済復興や発展の成果を有権者にアピールした。大々的に進められている油田開発については、イラク政府が反対姿勢を貫いているものの、メジャー級の企業も参入して自治区内ではすでに既成事実と化しており、選挙戦における議論は、もはや油田開発の是非ではなく石油収入の分配に移っている。そのため、ネチルヴァンKDP副党首は選挙キャンペーンにおいて、外国石油会

社の誘致による雇用創出とキャパシティ・ビルディングの機会の拡大を強調していた³⁾。

KDPの強さの要因は、こうした与党としての実績のアピールだけではない。クルディスタン地域においては、軍や警察官、学校教師、公務員などの雇用に対して、政党が絶大な権限を持っていると言われており、そうした雇用機会を通じたパトロン・ネットワークは選挙における強力な武器となっている。ネチルヴァンKDP副党首が、各家庭に1ヵ月当たり500～1,000ドルの石油の富を分配するといった公約を今回の選挙で持ち出したのは⁴⁾、広義のパトロン関係の構築につながるものだと言えよう。

KDPにとって最大の弱みは、支持基盤が地域的に限定されているということである。同党の得票率はドホーク県で70%に達する一方、スレイマニヤ県では11%にすぎない。この地域的得票傾向の偏りは、1992年の選挙時から大きく変わっていない。これは、バルザーニ一族の出身地がエルビル県北部のバルザーン村であることと無関係ではなく、政策より部族主義的な忠誠心が選挙においても依然として強く作用していることの現れとも言える。



KDP 支持者が集まる様子



投票の様子

PUK の凋落

KDP とは対照的に、PUK は今回の選挙で第三党に転落するという敗北を喫した。PUKの退潮は、今に始まったことではない。2006年に、PUK 創設メンバーの一人であり当時の副議長だったナウシルワン・ムスタファが、支持者を連れて離党した。そして2009年に立ち上げた新党ゴラン（「変革」の意）は、同年のクルディスタン議会選挙で111議席中25議席を獲得する躍進を見せ、この時に PUK は大きく票を奪われている。

しかしながら、2009年のクルディスタン議会選挙は拘束名簿式であったため、PUKは統一候補者リストを組んでいたKDPと議席を折半し、それまでと同様に与党の座にとどまり続けることができた。2010年のイラク国会選挙は非拘束名簿式であったが、それでも KDP と統一リストを組むことでその集票力に助けられた。PUK 自体の得票数は40.0万票と、ゴランの42.6万票を下回っていたにもかかわらず、14議席を得てゴランの議席数（6議席）を大きく上回り、イラク政界における主要政党というポジションも維持し得た。そしてその結果、党内改革を怠った PUKは、選挙のたびに得票数を減らし続け、ついに今回、名実ともに第三党へと転落した。同

党幹部のクバト・タラバーニがフェイスブックに記したように、「(PUK は) 当時の KDP との連立ゆえに、2009年、2010年の選挙結果から教訓を学ぶことができなかった」⁵⁾のである。

PUK はそもそも、KDP の封建主義や部族主義に反対する党内の改革派勢力が、1975年に立ち上げた政党であった⁶⁾。しかし、それから数十年が経ち、そうしたイデオロギーの違いは薄れ、KDP にしばしば言及される汚職や一族支配という批判は、PUKにも向けられるようになっていく。そして、KDPとの力関係が徐々に明らかになる中、自治区で権力を維持し続けるために、今では KDP のジュニアパートナーに成り下がってしまったと受け止められている⁷⁾。2011年2月に「アラブの春」に触発される形で、スレイマニヤでデモが多発した際、PUK は KDP の治安部隊の支援を得てデモ隊の鎮圧にあたり、10名の死者を出した⁸⁾。また、2013年6月にはクルディスタン議会で、KDP 党首であるバルザーニ KRG大統領の任期を2年延長する法案を、KDP と PUK が野党の反対を押し切って強行採決した。こうした一連の対応が、PUKの支持者の失望を招いたと考えられる。

KDPにおいて、バルザーニ一族の影響力がきわめて大きいことは疑い得ないが、その一方で、

党の方針は4年ごとに開催される党大会の多数決によって決定される仕組みが機能しており、党の一体性は強い。他方PUKは、もともと独自の支持基盤を持つ複数のリーダーが党に存在し、タラバーニ PUK 議長が党本部内のすべての組織のトップを兼ねて党を束ねる構造をとっていた⁹⁾。しかし、2005年にタラバーニ議長がイラク大統領としてバグダードに移ってからは、党内の調整が難しくなっていたと言われている¹⁰⁾。2012年末にタラバーニは脳梗塞で倒れ、現在も国外療養を続けているが、イラク大統領の後任ポストも PUK 議長の後任ポストも未だ決められないことが、PUKの党内の分裂と混乱を反映している。

ゴランの台頭

ゴランにとっては、今回の選挙が2009年の初選挙から3度目となった。2009年のクルディスタン議会選挙における44.5万票から、2010年のイラク国会選挙では42.6万票とやや票を減らしたが、今回は47.7万票を集めて盛り返した。過去4年間で野党であったために実績に乏しいこと、与党のようにパトロン・ネットワークを持っていないこと、KDPやPUKが候補者一人あたり約1万ドルの選挙準備資金を提供する一方¹¹⁾、ゴランの予算は限られていたであろうことなどから勘案すると、善戦したといってよいだろう。議席数では2009年の25議席から1議席減らして24議席に終わったが、KDP(38議席)に次ぐ第二党となり、域内の主要政党の一つとしての立場を確立した。

ゴランが選挙キャンペーンにおいて訴えていたことは、基本的に、二大政党が社会に対してきわめて大きな影響力を持っている現状の変革であり、具体的には、汚職対策、雇用機会の平等化、社会正義の実現、党政分離、司法の独立、政府の組織化、軍の脱政治化などである。KRGが積極的に進める石油産業の構築に対しても、

与党は開発や生産が進んでいる実績と石油収入の将来的な恩恵を強調する一方、ゴランは油田開発に伴う巨額の収入が行方不明になっているとして、それらは二大政党の幹部のポケットではなく国庫に入るべきものだと訴えた。バグダードとの関係においては、基本的に二大政党との間に立場の違いはない。しかしながら、イラク国会議員であるムハンマド・カイヤーニ議員(ゴラン所属)は、たとえばイラクの石油ガス法案に関して、密輸入を手元にとどめておきたい二大政党が、妥結に向けて中央政府と真剣に交渉に取り組んでいないことが交渉停滞の一因だと指摘しており、現状は党と党幹部一族の利益が、クルディスタンの利益に優先していると、厳しく批判している¹²⁾。

こうした現状批判は、特に若者を中心に支持を集めている。2009年の前回選挙で当選したゴラン議員の平均年齢は39.8歳と、2005年のイラク国会選挙時のKDP議員(49.3歳)、PUK議員(48歳)よりも相対的に若かった¹³⁾。今回の選挙においても、ゴラン系KNNテレビの番組ホストとして知られた若手ジャーナリストのアリ・ハマサーリフが、全候補者の中で最多得票数となる13万9,829票を集めた。ゴランがPUKから分離した後に参加した、こうした新たな層が拡大していることを示していよう。

ゴランの拠点にはPUKと同様にスレイマニヤで、特に市の中心地が支持基盤を構成しており、PUKは郊外の町や村に支持が強い¹⁴⁾。だが、ゴランもまた、かつてのPUKの支持基盤以上の地域にその支持を拡大させることはできておらず、エルビル県での得票率は18.4%、ドホーク県では2.9%に過ぎない。支持基盤の拡張は今後の課題だろう。

クルディスタンの政治システムの課題

今回の選挙では過半数を得た政党がなかったため、第八期KRGの組閣には連立が不可欠で

ある。しかし、連立交渉は難航しており、すでに選挙から2ヵ月以上が経っても組閣に至っていない。10月末の選挙結果の確定を受けて11月6日には新議会が開会したものの、閣僚ポストの分配が決まらないため、その余波で新議長の選出も遅れている。理論的には、従来通りKDPとPUKが連立を組めば合計56議席で過半数となるため、この2党が政府を形成することはできる。しかしながら、ゴランは今回、与党への参加を目指しており、第二党を組閣交渉から排除することは難しい。他方で、自治区においてはKDPやPUKを含まない政府というものも非現実的とみられている。

というのも、自治政府という行政組織が十分に制度化されておらず、90年代から続く政党支配の影響が今も根強く残っているためである。その最たるものが、ペシュメルガや警察などの暴力装置が未だに党の統制下にあるという点である。そもそも、イラク軍を相手にゲリラ闘争が行われていた時代から、クルドの部隊が一枚岩であったわけでは決してなく、政党や部族に忠誠心を持つペシュメルガが、時にイラク政府と協力しながら互いに勢力争いを繰り広げてきた。90年代初頭に自治が開始された時、自治政府の下で軍隊が統合されることになっていた

が、相互不信は簡単には解決せず、それぞれの勢力が独自の武力を保持するという構図が変わることはなかった⁹⁵。政治経済面も含めて党単位の支配構造を政府のそれに転換できないまま、90年代半ばに内戦に至り自治政府が分裂したことで、党の支配は継続し続けることになった。選挙を経て2006年には再度、統一自治政府（第五期政権）が組閣されたが、ペシュメルガ省、内務省、財務省といった、治安部隊と資金に関する省庁の統合は先送りされ、ようやく統合に至ったのは2012年5月、第七期政権になってからであった。これによって、形式的には政府機構がすべて一元化されたが、実際にはKDPとPUKがペシュメルガ、アサイシュ（治安警察）、諜報部隊などの治安機構の支配を維持し続け、資金の流れも不透明という状況は今も変わっていない。PUKがスレイマニヤ県で9万のペシュメルガとその他すべての治安部隊を配下に納めているという現状では⁹⁶、第三党に転落したとはいえPUKを排した政府は安定性の観点から現実的ではない。

90年代から現在まで続くクルディスタン地域の国家形成において、統治システムを組織化できていないことは、定期的実施される選挙によって政権を交代させるという、民主主義の基



投票所内への武器、カメラなどの持ち込み禁止を伝えるポスター



開票の様子

盤と齟齬を生じさせている。自治区内の3県の県議会選挙が2005年を最後に、再三実施が延期されているのは、現時点で選挙を行えばスレイマニヤ県でゴランが勝利を取めることが確実視されているため、KDPとPUKが延期させ続けているのだと見られている。また2013年6月にバルザーニKRG大統領は2期8年の大統領職の任期満了を迎えたが、議会で2年間の任期延長法案が与党によって強行採決された。これも、KDPが未だポスト・バルザーニ体制に移る準備ができていないことがその背景にある。現在の自治区は、与党が選挙結果を恣意的に左右し得るような権威主義的体制ではないが、他方で、選挙結果によって与党の交代が実現する民主主義的体制にも至っておらず、その過渡期に直面している。

イラク政治への影響

イラクでは、2014年4月に予定されているイラク国会選挙に向けて政党登録や政党連合の形成などの準備が進んでいる。クルド政党は前回2010年の選挙において、前々回（2005年12月）と比較して議席数を減らしている。2005年12月には275議席中58議席を得たが、2010年3月の獲得議席は325議席中57議席にとどまった。そのた

め、選挙法改正法案の議論において、クルド政党は選挙制度の変更を強く求めていたが、他党の理解が得られず、制度は微調整されるにとどまった。しかしながら、クルド政党が議席を減らした要因は選挙制度の影響と同時に、域内の与野党が国政選挙でも別々に出馬した結果、票の分散を招き、とりわけキルクーク県やニナワ県など自治区外で死票を増加させたためでもある。逆に、2013年の県議会選挙では、与野党すべてのクルド政党が統一候補者リスト「同胞と共生の同盟リスト」を形成してニナワ県、サラーハッディーン県、ディヤラ県の選挙に挑んだことで、全県での議席の確保並びにニナワ県で第一党になるという成果につながった。2014年のイラク国会選挙においても、同様の対応がとれるかがクルド政党の選挙結果を左右するだろう。

クルディスタン議会選挙において、イラク政府との関係や、イラク国政に関わる問題は全く選挙の争点にならなかった。自治が確立し、「事実上の国家」となっている現状を反映していると言えよう。自治区内の社会問題、政治問題、経済問題が選挙キャンペーンの中心である現状は、「クルドのため」という民族主義を選挙スローガンにする時代がすでに過ぎたことを示し

ている。他方で、イラク政府とKRGとの間には、資源や土地、軍、財政などを巡って解決していない問題が山積している。クルディスタンが独立国家になるという夢が実現する具体的な展望も、今のところまだ描けていない。イラク政府に対するクルディスタン地域の主張や要望については各党とも立場は大きく変わらない。それゆえに、自治区の「外交」面では足並みを揃え、かつ「内政」面で多様な意見を包摂して社会改革や政治の制度化に取り組んでいくという二つが両立できるかどうか、クルディスタンの安定と繁栄を左右することになるだろう。

(2013年12月10日脱稿)

(注)

- (1) 2005年制定の憲法ではイラクは連邦国家と定義されており、県と、広範な権限を有する「地域（イクリーム）」がその構成要素とされている。従って理論的には、「地域」は中央政府から委譲された権限を持つ「自治区」ではなく、連邦構成体とも呼ぶべきものである。しかしながら、現実にはイラクにおける「地域」はクルディスタン地域のみであり、イラク全土に連邦制度が浸透しているわけではないことと、用語の煩雑さを避けるため、本稿では自治・自治区の用語を使うこととする。
- (2) UNAMI（国連イラク支援団）、Fact Sheet: Elections in the Kurdistan Region of Iraq 2013, Sep 18, 2013. (http://unami.unmissions.org/LinkClick.aspx?fileticket=FKfm_oMnSTM%3d&tabid=5464&language=en-US) ただし、イラク市民権とは別に、どのような基準でクルディスタン地域の市民権が規定されているのか、詳細は不明。
- (3) The Report Company による2013年9月19日付けのネチルヴァン KRG 首相（KDP 副党首）のインタビュー。（<http://www.the-report.net/iraq/kurdistan-region-sep2013/639-inter>

view-nechirvan-barzani-prime-minister-of-the-krq) 2011年11月20日アクセス。

- (4) *al-Mada*, Sep 08, 2013.
- (5) *al-Hayat*, Nov 11, 2013.
- (6) David McDowall (2004) *A Modern History of the Kurds*, I.B.Tauris, p.343.
- (7) Michael Rubin, "Gorran can Determine Region's Future, not PUK or KDP," *The Vote*, Sep 26, 2013; Sangar Jamal, "The Biggest Loser: Shift in Kurdish Political Landscape Sees Major Player Relegated," *Niqash*, Sep 26, 2013.
- (8) Kamal Chomani, "Iraqi Kurdistan's Historic Election," *Foreign Policy*, 28 Sep, 2013.
- (9) Gareth R.V. Stansfield (2005) *Iraqi Kurdistan: Political Development and Emergent Democracy*, Routledge, pp.103-120.
- (10) 勝又郁子「イラク：クルディスタン地域選挙」中東研ニューズリポート, 2009年8月11日。
- (11) Sangar Jamal, "Kurdish Elections on Saturday: Campaigning Fierce Thanks to New System," *Niqash*, Sep 19, 2013.
- (12) ムハンマド・カイヤーニ・イラク国会議員（ゴラン所属）への記者インタビュー。2013年9月21日にエルビルで実施。
- (13) 木我公輔（2011）「もう一つのイラク：クルディスタン地域政治の変容－揺らぐ二大政党支配とゴラン運動の挑戦－」『外務省調査月報』, No.2, 8頁。
- (14) Mushreq Abbas, "Iraqi Kurdistan's Election Campaigns in Full Swing," *al-Monitor*, Aug 30, 2013.
- (15) 勝又郁子（2001）『クルド・国なき民族のいま』新評論, 44-45頁。
- (16) Palash Ghosh, "Kurdistan Parliamentary Election: Who Are the Players? What Are the Stakes?," *International Business Times*, Sep 25, 2013.